

川の水だけは我々が死んでも流れていくだろうから
これからも守っていききたい

長編記録映画
川はだれのものか
大川郷にいきる



監修：菅 豊（東京大学東洋文化研究所 教授）

企画・制作・演出：菊地文代 前島典彦

撮影：前島典彦 山谷明彦 高橋秀治 長田浩一

編集：長田浩一 イラスト：米丸晋司 タイトル：小林 一

制作：株式会社 周

2013年/カラー/DVCAM/スタンダード/126分

大川は、豊かな自然を育んでいる。しかしその川の豊かさは、偶然に生み出されたものではない。また「エコロジー」という思想で、自然というものに本質的な価値を認めた上で、意図的に保護されてきたものでもない。それは、沿岸住民の長い年月にわたる生活のなかで、濃密な「使う」という行為を通じて形作られてきた豊かさなのである。この「使う」という行為は、その行為を続けるための利用の仕組みや世界観によって支えられてきた。その仕組みや世界観は、川とともに暮らす生活者以外の眼には見えにくい。確かにこの川を包み込んで沿岸住民の行動を律している。大川では秋口から鮭漁が行われる。集落ごとに川を厳密に「漁場区」に分け、さらに集落内で個人の漁場に区分けし、入札や籤引きで個人に配分して鮭漁を行う。かつては、入札で集まった費用は集落の自治運営費に充てられていた。そのため、鮭と川は集落に帰属する共有の財産として考えられていた。そのような「みんなのもの」として管理する社会的な仕組みが、大川の豊かさを生み出してきたのである。

さらに、そこには眼に見えない精神世界も広がっていた。たとえば、鮭を捕った瞬間、鮭漁師たちは、鮭の頭を棒で叩いて絶命させる。それを見た都会人は一瞬ひやりとする残酷さを感じとるかもしれない。しかしその感覚が、生活のなかで自然と対する必要のない人間の偏った感覚であることに気がつかなければならない。それは単に動物を殺しているのではないのである。鮭漁師は、鮭の頭を叩くときにエビス様という神の名前を唱えるものだとされている。そして「鮭は各家のエビス様に供えられるために川を溯ってくる」と語られる。捕られた鮭は、漁小屋のエビス様の神棚に供えられ、次いで家のエビス様の神棚に供えられる。それが終わって、ようやく人びとの食べ物になるのである。大川の鮭漁は単なる経済活動としてあったのではなく、それ自身が神との交流だった。

こういう眼に見えない社会的仕組みや精神世界は、昔は日本の各地に見られた普通の仕組みや世界であった。そしてそれが、生活と密着した自然の豊かさを支えていた。しかし、現在、そのような仕組みや世界は眼に見えないだけではなく、本当に見ることができなくなりつつある。かつて人びとの生活を支え、そして人びとを喜ばせ、楽しませてきた自然と人間との深い関係性。そのような関係性を描いたこの映像は「いま」を生きる私たちの自然との交わり方に内省を迫るものである。菅 豊（東京大学東洋文化研究所 教授）



企画意図

前作「こつなぎ 山を巡る百年物語」は、明治の近代化によって失った山林入会の裁判事件をとりあげ、「山は誰のものか」を問うものでした。裁判に生涯をかけた原告の一人は、「土が自然に出来ているし、山でも川でも地球の一部でしかないでしょ。これが誰のものかというのは変なんですよ。」と語ってくれた。この言葉に導かれて「川はだれのものか」を問うために、次にむかったのは、鮭の溯上する新潟県最北部、旧山北町を流れる大川。明治の近代化、更に戦後の水産漁業の法整備や市場経済の変化に対応し乍らも、江戸時代から続く伝統漁法と地域の自治を今も維持している。

専業漁師ではない大川のサケ漁師の魅力あふれる群像から、元気を受け取って頂けるのではないかと、思います。菊地文代（株式会社 周 代表）

あらすじ

新潟県の最北端に位置する旧山北町大川谷地区。大川郷とよばれるこの地域の風土を育んでいるのが大川である。大川流域では、溯上してくるサケを大きなカギで掻き捕るといった原始的な漁が伝承されている。300年以上受け継がれてきた伝統的サケ漁「コド漁」である。

毎年8月中旬、地元サケ漁師たちは、集落ごとに独自で『川分け』を行い各自の場所・公使料(負担金)を決めていく。鮭漁が終わる9月中旬、コド漁の準備が始まる。そして晩秋、サケの溯上を待ちかまえる。11月下旬、大川は自然(神様)からの恵みを授かる人びとであふれる。「自然に寄り添い自然に生かされる」そんな当たり前の暮らしを守り続けている大川郷の人びとの姿を記録した1年間の物語である。

映画を観て

お金や効率を追求する大きな社会システムをふわりとかわしながら、しなやかに自分の足で立つにはどうしたらいいんだろう…。そのヒントをこの大川郷に生きる人達が教えてくれた。

現在の鮭漁は、川の途中で堰を作り溯上してくる鮭を一網打尽にする一括採捕が主流らしい。生命がお金と同等に扱われる世界だ。一方「コド漁」とは、川淵に竹や藁などで手作りした仕掛けを設け、溯上してくる鮭を誘い込んでカギで釣り上げる300年も続く伝統漁法。人間と鮭の知恵比べで両者互角に渡り合い、授かった鮭は神様に奉納し、いのちを敬いながら食し、卵は自分達の手で孵化して川に還す。

なんといってもこの「コド漁」に励む男の人達が実に可愛くてカッコいい。こだわりのやで几帳面、遊び感覚たっぷりな嬉々としている。時間も手間もかかるが、自然への敬意と、共に生きることの喜びがあふれる世界。そしてそこにすくすく立つゆるぎない軸。山はだれのものかを問うた前作「こつなぎ」での言葉「山も川も地球の一部でしかないでしょ、我々は地球の子なんだから」が、ここ大川郷でもこだましている。 堀山 肇子（『身の丈』社会事業コーディネーター）

自家採種の種は、代々採種を繰り返すことで人為的、風土的に選抜され、その土地で生きていく力が遺伝子レベルで強くなる。人がその土地の物を食べ、同じ沢の水を飲み、ふるさとの代々生きることも、生物としてとても理にかかっている。人びとはそうやって生きる工夫や文化を生み出し社会を組み立ててきた。鮭は、人が住む遙か昔から大川を母川として溯上し、生きることを通して海の栄養を陸に揚げてきた。その風土の中で、その恵みをいただき、糧として育まれてきた大川郷の文化。その臨場感のある描写が、とても大切なものごとが大昔から育まれ、今、失われつつあることを伝えてくれる。本来ある人の暮らし、その人にとって本当に大切な価値観や文化は、ふるさとのにあるのだ。 四井真治（パーマカルチャーデザイナー）

5/16(木)ロードショー
特別鑑賞券 ¥1,000 絶賛発売中!
(当日一般 ¥1,200のところ)



AUDITORIUM Shibuya
150-0044
東京都渋谷区円山町1-5 KINOHASU 2F
info@a-shibuya.jp TEL: 03-6809-0538
13:00 15:40 18:20